

展覧会感想

「壮麗と質実 心齋橋大丸と通信省の ヴォーリス建築原図展」

井村 恵美

① 日本の近代建築と都市景観への警鐘

ウィリアム・メレル・ヴォーリス (1880—1964) は、米国から英語教師として来日したが、のちに日本で建築事務所を設立し、各地で数多くの近代的な西洋建築を残した人物である。ヴォーリス建築事務所 (現・株式会社一粒社ヴォーリス建築事務所) が手がけた代表的な建築に、神戸女学院大学 (重要文化財)、同志社大学、関西学院大学などの学校建築のほか教会、住宅、商業施設など国登録有形文化財を含む名建築が数多く残っている。しかしながら昨今、老朽化や耐震性その他さまざまな事情から現存が危ぶまれる建築物も出てきている。その一つに昭和8 (1933) 年に竣工した大丸心齋橋店本館 (以下「心齋橋大丸」) がある。

同館は日本の百貨店建築の傑作として、また大阪の都市景観、御堂筋の街区を象徴する存在として知られ、人々に長年愛された建築の一つであるが、平成27 (2015) 年末をもって建て替えのため一時閉鎖となっている。

同年、建て替えを知った多くのファンがその姿を惜しみ、同館の現状存続や戦災による喪失部分の復元を求める声が高まっていた中、日本の近代建築と都市景観のあり方を考える試みとして心齋橋大丸の建築原図と現存する写真資料を中心とした展覧会 (主催: 心齋橋大丸原図展実行委員会) が企画され、同年夏に大阪・京都・神戸・近江八幡 (滋賀県) を巡回した。巡回展では多くの報道機関の取材を受け、日本の近代建築の未来を考えるムーブメントを巻き起こした。

「この流れを東京にも」という思いから、東京では、学校法人青山学院が平成27 (2015) 年12月に間島記念館 (青山学院資料センター) を会場に展覧会「壮麗と質実: 心齋橋大丸と青山学院の建築原図展」を行い、併せて同大総合文化政策学部によってシンポジウム「ヴォーリスを伝える～意義と課題」が開催された。そしてクロージングとして平成28 (2016) 年1月23日から2月2日まで、当館で「壮麗と質実: 心齋橋大丸と通信省のヴォーリス建築原図展」(図

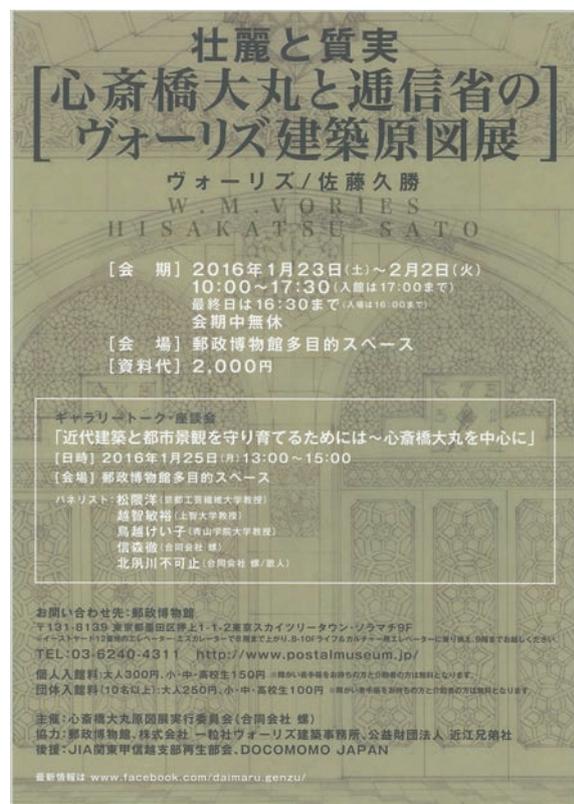


図1 展覧会チラシ

1) と題した展覧会が開催された。

2 建築資料から文化的価値の重要性を語る

本展のプロジェクトは、主催を心齋橋大丸原図展実行委員会、協力に当館のほか株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所、公益財団法人近江兄弟社、後援には公益社団法人日本建築家協会（JIA）関東甲信越支部再生部会、DOCOMOMO Japanが参加。各機関の協力により初公開の資料などもお目見えした。

本展開催趣旨について、主催の心齋橋大丸原図展実行委員会ではこう述べている。

心齋橋大丸は、戦災による損傷をはじめ店舗建築として時代の流れによる変化が加わってはいるが、今なお外観はほぼ竣工当時の威容を保ち、内部空間も四つのエントランス、グランドフロアの大きな空間とエレベータホール（図2）や階段室など、かつての華麗なる空間を残している。また空襲で失われた和洋二つの大食堂、増改築に際して埋められた一階から屋上に至る華麗な吹き抜け空間や大階段等、現存しない部分も含め、本邦随一の壮麗を極めたる百貨店建築の魅力的な内部空間こそこの建築の真髄であり、今後未来に向けてますます輝きを増すポテンシャルを有しているといえる。

そこで、貴重な設計原図や写真等によって、竣工当時のオリジナルな状況を紹介し、専門家のみならず広く一般の人々にも、この建築の文化的価値の重要性を体感できる展覧会を開催する。

古きを温ねて新しきを知る——。このような主催者の思いと貴重な建築資料の公開は、“心齋橋大丸”の昔を知る人から初めて目にする人まで多くの来場者に感動を与える機会となった。

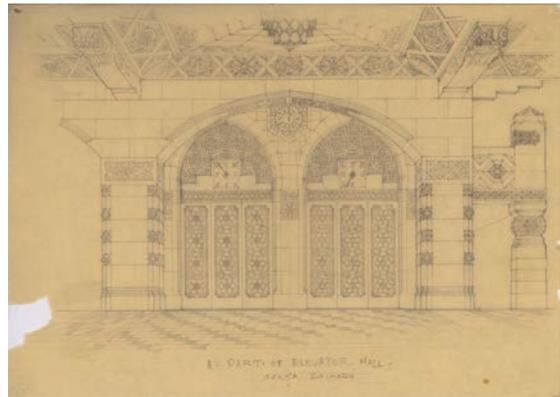
3 ヴォーリズと郵便局建築

ヴォーリズ建築事務所は百貨店のほかに学校や教会など様々な建築を手がけているが、その一つに郵便局がある。郵政博物館会場では、当館と関連のある郵便局の原図コーナーが新設された。

例えば大正10年（1921）年に完成した旧八幡郵便局舎（図3）は、アールを描いた窓や玄関部分に象徴されるように、お客様を迎える空間には優美な雰囲気が感じられる。一方で全体では、事務室や作業場が併設される郵便局ならではの業務機能が考慮され、採光等を計算した郵便局建築の姿が表れている。このような通信省時代の小規模な郵便局は、和洋折衷のモダンさと機能美が特徴として挙げられるだろう。

ヴォーリズの手による郵便局舎図面など旧通信省時代の初公開資料が展示され、「壮麗な百貨店建築」と「質実の郵便局建築」を比較することができ、郵便局図面からは使いやすさを追求した設計とモダンなデザインにより、郵便局建築の一端に触れることができた。

旧八幡郵便局舎の原図に加え、大正4（1915）年竣工の旧醒ヶ井郵便局局舎（図4）の原図



株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所蔵

図2 エレベータホール原図



株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所蔵
図3 旧近江八幡郵便局舎彩色図面



株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所蔵
図4 旧醒ヶ井郵便局舎立面図

も展示された。建築関係者のほか日本郵政株式会社施設関係者らからは、細部までこだわって設計された図面を前に「郵便局建築に携わるものとしてあらためて身の引き締まる思い」「今後に生かしたい」などの感想を得たほか、熱心に図面を確認する姿が見られた。

郵便局建築の面からも、ヴォーリズ建築を通じて未来に継承すべき日本の近代建築の美と価値を深く知るきっかけになる展覧会となったといえるだろう。

4 近代建築と都市景観を守り育てるためには

1月25日には、主催者により以下5人のパネリストを迎えて「ギャラリートーク・座談会：近代建築と都市景観を守り育てるためには～心齋橋大丸を中心に～」が開催された。

- ・ 松隈 洋氏（建築史家・京都工芸繊維大学教授・DOCOMOMO Japan代表）
- ・ 越智 敏裕氏（上智大学法学部教授・弁護士）
- ・ 鳥越 けい子氏（青山学院大学 総合文化政策学部（環境文化学／環境デザイン）教授）
- ・ 北夙川 不可止氏（合同会社 螺 クリエイティブディレクター・歌人）
- ・ 信森 徹氏（合同会社 螺代表／一般社団法人 旧ジョネス邸を次代に引き継ぐ会副代表）

ギャラリートークでは、①「建築はそれだけを単独で取り上げて論じることができるものではなく、極めて社会的・公共的な存在」②「同時に知覚や記憶・感情といった極めて私的な領域との結び付きに支えられてもいる」という「建築・景観の公共性」をテーマとしたものとなった。

各パネリストからは、日本における近代建築の現状、文化財保護の観点から発表があったほか、欧州の都市景観と観光との関わりなど先進的取り組みの実情といった比較が行われ、座談会では来場者との活発な意見交換が行われた（図5）。

本件については、前述した青山学院大学総合文化政策学部主催のシンポジウム報告のなかで、その内容の一部が紹介される予定である。



図5 ギャラリートーク・座談会

⑤ むすびにかえて

短い会期にもかかわらず、SNS等での情報発信やメディアの取材効果もあり、建築の専門家からモダニズム建築のファンまで幅広い来館者が訪れた。会場では常時、主催者の展示解説や来館者意見交換が行われ、「観る」だけでなく「聴く」「話す（議論）」という手法により、来館者に対して近代建築についての理解と興味をより強く促すことができた。

また、座談会では郵便局に代表される通信（郵政）建築の今後についても取り上げられた。通信（郵政）建築については、郵政民営化以降、新開発の時代が到来している。街の顔（象徴）として要地に建つ郵便局も、局機能の統廃合や駅前ビル開発の波の中で変容を遂げ始めている。心齋橋大丸と同じく、当時の技工や機能美は一度失われれば再構築することはできない。これからの日本には、壊すだけではなく建物の持つ歴史などを施設の付加価値として開発するスタンスも必要ではないだろうか。当館では、今後も通信（郵政）建築の歴史的価値を見出すための記録収集などに努めていく。さらに街づくりとの関係性などについても明らかにする必要がある。

本展覧会の開催にあたり、原図など貴重な資料の公開の場として郵政博物館が協力の機会を得られたことを、関係各位に厚く御礼を申し上げる次第である。

（いむら えみ 郵政博物館 主席学芸員）